

八千代市長兵衛野出土の土器について

藤岡孝司

1. はじめに

今回紹介する資料は、当センター萱田事務所近隣に在住の菅井光男氏によって届けられたものである。

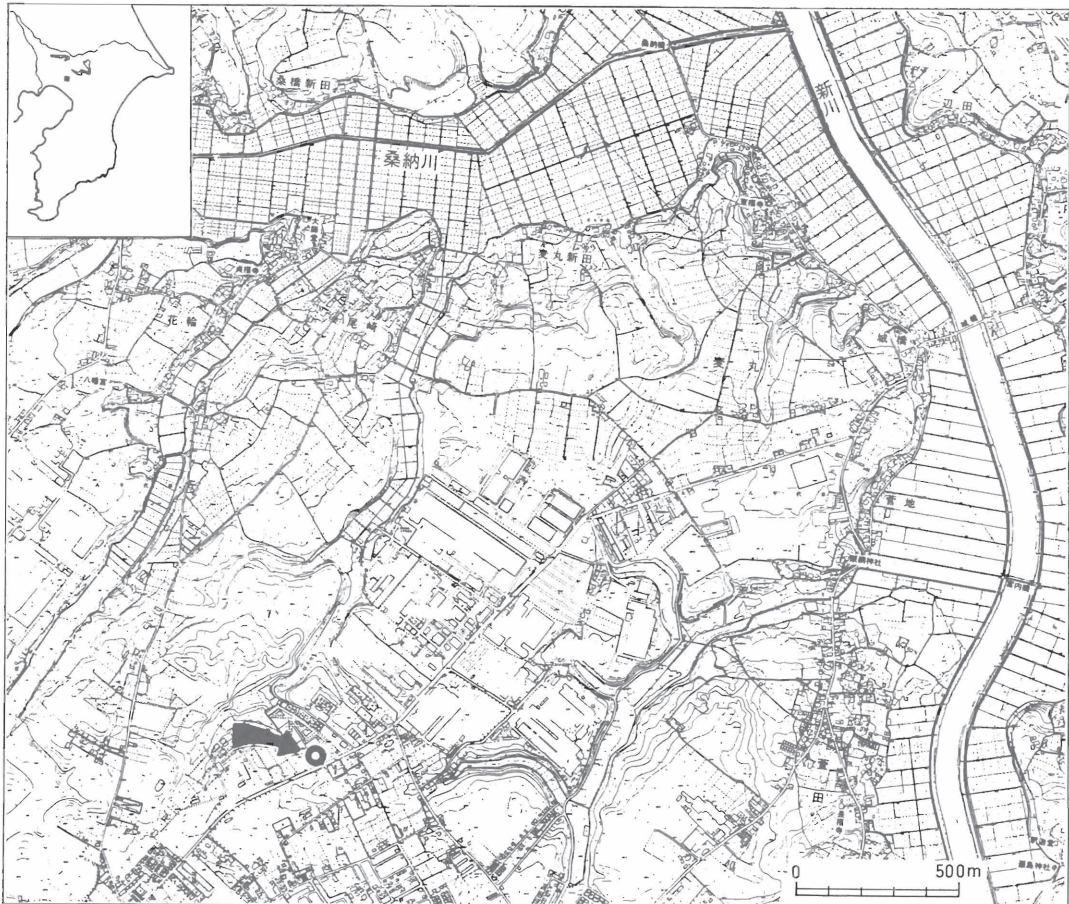
採集地点は八千代市大和田新田字長兵衛野 747 で、八千代工業団地の一画に位置している。建造物等のため、現在遺物の散布状況を把握することは困難であるが、旧地形が残存すると考えられる地域もあることから、遺跡として注意する必要がある。

現在遺跡として登録されていない地点（註1）であり、遺跡の性格・時期等を明確にしておく必

要があると考え、ここに若干の私見を加え、報告するものである。

2. 遺跡の概観

下総台地の一画に位置する八千代市は、印旛沼南西部にあたり、印旛沼水系が複雑に入り組んだ地形を呈している。その恵まれた自然環境の中にあつて、市内に流れる河川流域には多数の遺跡が分布している。そうした河川の一つ、印旛沼より注ぐ新川（旧平戸川）に合流する桑納川からはいくつもの谷津が南へ向ってのびており、その谷津に面して数多くの遺跡が存在するが、当遺跡もそ



第1図 遺跡の位置と周辺地形図

の中の一つである。(註2)

遺跡は標高約20mを計る谷津の東側に面する台地上に立地しており、この谷津を挟んで対する台地上には大和田新田芝山遺跡、長兵衛野遺跡等、縄文時代中・後期(加曾利E式、加曾利B式)、奈良・平安時代の遺跡が確認されている。また、当遺跡直下の谷津においては以前湧水が存在しており(註3)、飲料水等に広く活用されたものと思われる。

遺物が採集された地点は標高約26mを測り、整地以前は杉・松林となっていた。現在でも一部当時のまま緑地保存されている地域があり、また整地作業による削平がほとんどないと考えられる地域もあることから、遺跡が一部残存する可能性も大であろう。

3. 出土遺物

出土遺物は総計約600個に達する。縄文時代中

期及び後期に属するものであり、その割合は9:1である。いずれも小片であるため、器形を復元し得るものは皆無であるが、類例により想定することは可能である。

以下、出土土器について説明する。

第1群土器(第2図) 中期の土器を一括する。

第1類 有孔罎付土器である。

1が相当し、口縁部破片である。口縁が直線的に極端に内湾することから、肩部が強く屈曲する浅鉢状の器形を呈すると考えられる。罎は断面方形で平坦であり、この罎に2つの小孔が穿たれているのが認められる。現存部において文様はない。

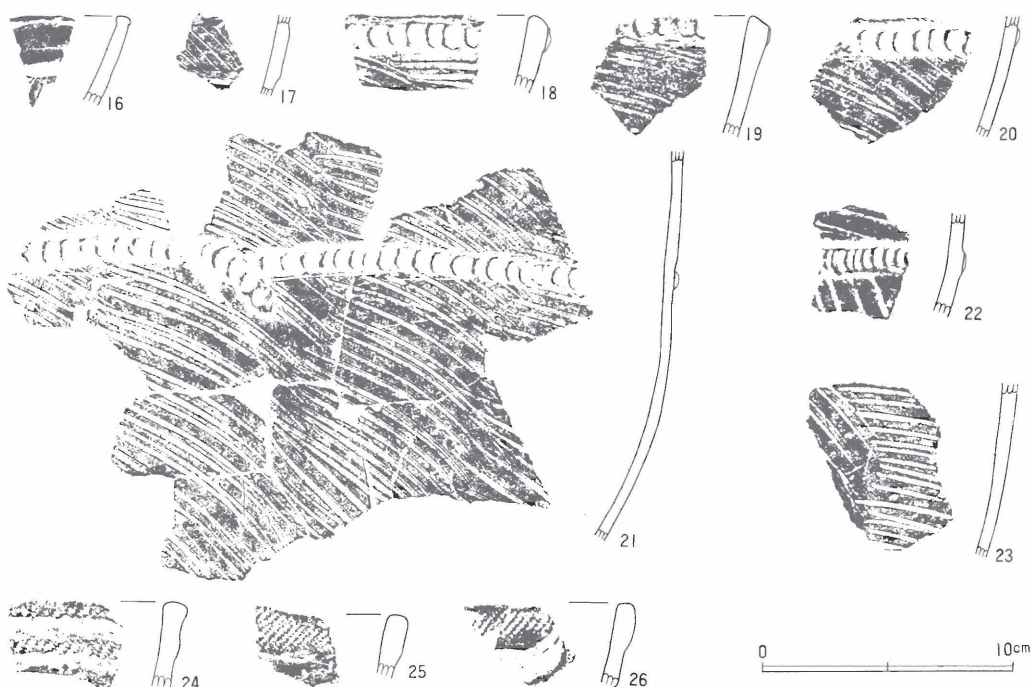
第2類 曾利式土器である。

2、3の2点が相当し、いずれも胴部破片であるが、2は頸部にかかる部分である。半截竹管による沈線文が地文となり、2は粘土紐の貼り付けによる蛇行懸垂文が認められる。

第3類 加曾利E式土器である。



第2図 第1群土器実測図



第3図 第II群土器実測図

a種 縄文を地文とするもの。

4～11が相当する。4は口縁部破片で、口縁に平行に2段の隆帯を有する。5は微隆起帯を懸垂させ、縄文を磨消している。6は口縁部破片で、隆帯とそれに沿った沈線によって縄文が区画される。7は隆帯のみで、沈線は認められない。8、9は縄文と沈線によって構成され、9は縦位の所謂「磨消し縄文」である。10は2本の微隆起帯を渦巻状に配し、縄文を磨消したものである。11は口縁部破片で、縄文のみで構成されるが、口唇部は無文となり、その間に沈線あるいは微隆起帯は認められない。

b種 条線文を地文とするもの。

12、13、15が相当し、いずれも胴部破片であるが、12・13と15は施工工具及び文様に違いが見られる。12・13は縦位に細かな条線文が施され、15は波状にやや雑な、むしろ沈線とも言うべき条線文が施される。

c種 縄文と条線文により構成される。

14が相当する。太い沈線により区画され、上位（口縁部文様帯）には縄文、下位（胴部文様帯）には波状の条線文が施される。

第II群土器（第3図） 後期の土器を一括する。

第1類 加曾利B式土器である。

16、17が相当する。いずれも精製品で、斜位に沈線が施される。

第2類 安行式土器である。

a種 紐線文系土器

粗製土器と言われるもので、18～23が相当する。いずれも口縁部及び胴部の破片であるが、口辺部及び胴部（あるいは括れ部）に2本の紐線文を有すると思われる。空間は条線によってのみ構成され、縄文は認められない。砲弾状の器形を呈する深鉢形土器である。

b種 帯縄文系土器

精製土器と言われるもので、24～26が相当する。いずれも口縁部破片である。24は平口縁、25は波状口縁を呈する。26は斜位に瘤がつけられた形跡が破損部において認められる。

4. まとめ

いくつかをピックアップして説明を加えたが、出土土器についてはほぼ全容を把握し得ているものとする。

まず、有孔鏝付土器であるが、知見による限り県内で8遺跡目の出土例である。有孔鏝付土器については近年相次いで論考が発表されているが、まだまだ不明な点も多い。本例は、小孔が器壁でなく鏝に穿たれることから、中期後葉に属するものと考えられる。しかしながら、この期の特徴として他に、鏝が断面三角形を呈し、壺形の器形になることが挙げられており、本例は若干様相を異

としているようである。中期後葉でも比較的古い段階の所産であろうか。また、曾利式土器が2点だけ出土しており、II～III式に比定されるものと考えられるが、有孔鏝付土器と併せて、中部高地との関連性が注目されるであろう。

加曾利E式土器は、最も多く出土する類であるが、具体的な時期の不明なものも少なくない。明確なものについてはIII～IV式に比定され、比較的新しい時期の所産である。図示した中では6が最も古く、III式でも古手に比定されよう。他はIV式に属するものと考えられるが、その中でも10は比較的新しい要素を有している。

後期の土器は加曾利B式土器と安行式土器があるが、小片あるいは粗製土器が大半を占めており、不明瞭と言わざるを得ない。しかしながら、安行式期の粗製土器は比較的大形破片に復元されており、割口が新しいことから本来さらに接合し得たことは確実であることは、当地上で安行式期の集落が営まれていた可能性を大きく示していると言えよう。

5. おわりに

当地地上において、中期加曾利E式期及び後期安行式期を中心とする縄文時代集落が営まれたことは、出土土器あるいは地理的環境を見ても明確になってきたものと考えられる。

特に、有孔鏝付土器の出土は県内でも類例が少なく、また曾利式土器についても、当遺跡に近接し、現在大規模に調査が進められている萱田地区遺跡群内においても出土していない。加曾利E式土器と曾利式土器との関係を中心として、当地方の縄文文化解明の手がかりを提示したものと考える。

八千代工業団地地区は遺跡として空白地域となっているが、これはすでに工業団地が造成されていることに起因するものである。萱田地区ヲサル山遺跡(註4)においても、小規模ではあるが縄文期の集落が北側工業団地内へのびる可能性を有して検出されており、この地区一帯が規模の大小は別として、縄文期を中心とする集落が営まれていたことが推察される。今一度遺跡の有無について十分に検討する必要がある。

なお、今回報告した資料は、寺田源次郎氏が保管されていたものである。

末筆になったが、今回資料の紹介をするにあたり、下記の方々にいろいろと御教示・御協力をいただいた。記して深く感謝する次第である。

杉山晋作氏、寺田源次郎氏、菅井光男氏、大野康男氏、宮城孝之氏。

註

- 1) 八千代市で初めて全域にわたる分布調査が開始されたのは、昭和45年である。従って、それ以前に造成された大和田新田の工業団地所在の遺跡については、十分な把握は困難なところである。
- 2) 当センターで調査を実施している萱田地区遺跡群にも近接しており、地理的環境・歴史的環境等の詳細については『八千代市権現後遺跡』を参照願いたい。
- 3) 菅井光男氏の御教示による。
- 4) 昭和56・57年度の2年度にわたり、筆者らが調査を実施しており、今年度報告書刊行の予定である。

参考文献

- 千葉県立八千代高等学校史学会 『史学報』第3号 昭和47年
八千代市教育委員会 『八千代の遺跡』 昭和58年
財団法人千葉県文化財センター 『千葉県埋蔵文化財分布地図(1)一東葛飾・印旛地区一』 昭和60年
財団法人千葉県文化財センター 『八千代市権現後遺跡』 昭和59年
長沢宏昌 「有孔鏝付土器の研究」 『長野県考古学会誌』35号 昭和55年
山梨県立考古博物館 『第2回特別展 縄文時代の酒造具』 昭和59年
丹野雅人 「注口土器小考一縄文時代中期終末期における様相一」 『東京都埋蔵文化財センター研究論集Ⅲ』 昭和60年
神奈川考古同人会 『シンポジウム 縄文時代中期後半の諸問題』 昭和55年
長岡 芳 「茨城県西地方に於ける安行I式土器の分析一下館市大塚遺跡(1)の資料一」 『常総台地』12 昭和56年

(第3班 萱田事務所)